

自分に勝つ



雑古哲夫七段 インタビュ

(文中敬称略)

基礎的な体力作りをさせられ、それが何ヶ月も続くと「早く防具を着けて練習したい」との思いがつのります。ある日、先輩に「防具を持って走りに行くぞ!」と言われました。「なぜ防具を持って走りに行くのだから」と思いましたが、走っている間に神社に着いたんです。そこで「ここが日本拳法創始者の澤山先生が練習をされておられた垂水神社だ。今からここで防具を着けて練習する」と言われました。

なぜ、垂水神社で練習するのかわかると、「まだ夏休みにもなっていないのに新入生に防具を着けて練習させるとは何たることだ!」と顧問の西山先生に怒られるからです(笑)。でも私にしてみたら嬉しかったです。日頃見ていたら、先輩だけ強そうに見える人は少なかったので「今日はやっつけてやるぞ!」と思いました(笑)。でも防具を着けて練習したら、さんざんという言葉がとでも似合うくらいに、やられてしまいました。それで「何ですごいんだ! これを見るのとやるのでは大違い! こんな格闘技があつたのか!」と思いました。

——頭角を現したのは高校からですか。
雑古 高校の時は頭角を現すというほどではありませんでした。生徒会の活動を2年間ほど行い生徒会長もしていましたので、忙しくて練習に行かないこともありましたが、でも力は強かったのが高校の全日本個人戦ではヘタなりに三位になりました。

関西大学に入学した時、日本拳法を続けてやってみようと思って入部したのですが、「どうせ入るのなら、一番に入部しよう」と思い、入学してすぐに入部しました。そうしたら「入学そうそう入部する学生は珍しい。なかなかいい心意気だ!」と言って褒められました。練習に参加すると、大学の先輩は強かった。高校で3年間練習をしていましたが、大学1年生と4年生では実力に雲泥の差がありました。いろいろな練習で「こんな強い先輩がこんなにたくさんいるんだ」と思い、足下にも及ばないけれど、毎日、毎日、ただ、ただ一生懸命立ち向かっていく、という感じで練習しました。

でも入部してからしばらくの間は、大学は勉強するにしても、何をやるにしても

◆幼稚園の頃からカラテチョップ

——先生は、子供の頃はどのような少年でしたか。

雑古 やんちゃな少年だったと思います。よく小学校から母に呼び出しがかかっていたのを覚えてます。とりあえず負けるのがキライなガキ大将タイプでしたが、内心すごく気が弱かったので、そのせいか強くなりたいたいという気持ちが芽生えたのだと思います。

祖父の家に、木がたくさん植えられていたので、その木に登って遊んでいました。だから子供の頃から相手を腕で引き付けるような力は強かったと思います。

——最初に武道を始めたのはいつですか。
雑古 幼稚園くらいです。父の友人がカ

ラテチョップで下駄を割ったのを聞き、私も小さいながら下駄を叩いてみました。が、割れるものではないですね(笑)。それで「空手はすごいものだ!」と思い、自分なりに突きや蹴りの練習を始めました。

——本格的に始めたのはいつ頃からですか。

雑古 高校に入学して日本拳法部に入部した時です。私は空手をやりたいと思っていたのですが、当時、関大一中には空手部がありませんでした。野球部や美術部にも入部しましたが、3年生の時に「高校に入ったら空手部に入る」と決めていたので、「腰を鍛えなければ」と思い、柔道部に入部し腰を鍛えました。

——そして高校に入学すると空手部を見学に行きましたが、空手部の横で拳法部が